国立国語研究所学術情報リポジトリ

国立国語研究所要覧 1955

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-02-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0000001844

国立国語研究所

要覽

国立国語研究所の任務と機構　2—3
各研究室の研究状況　4—9
刊行物と研究業績　10—11
施　設　12—13
名　簿　14—15
庁舎の平面図・交通略図　裏表紙

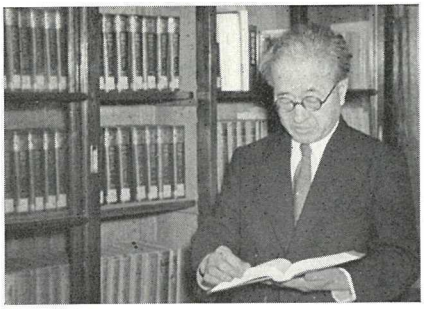
1955

0
0
0]
95846

国立国語研究所の任務と機構

任務　国立国語研究所は，国語および国民の言語生活に関する**科学的調査研究**を行い，それによって**国語の純化・合理化**の基礎を築き，**国語政策の確実な資料**を提供し，**社会生活の改善向上**に寄与することを任務としている。

創設の理由と経過　国語国字の問題は，**幕末開国以来の国民的問題**であって，日本が近代国家として立つためには，ぜひとも解決しなければならないものであった。明治以来，その解決の必要が叫ばれながら十分な成果をあげ得なかったのは，**基礎的問題に関する調査研究**が不十分なためであった。この事は，早くから識者の指摘するところであったが，戦後，特にその欠陥が認識され，学界，新聞，放送その他各方面から，有力な研究機関の設置が要望された。その結果として，**昭和23年12月**，法律第254号によって，国立国語研究所（文部省所管）が設立された。



西尾所長

研究の目標と内容　創立以来，国立国語研究所は，国民相互の意志通達において，また新聞放送公示等のマス・コミュニケーションにおいて，用語用字の統一・整理をはかることが急務であることを認め，国民の言語生活の実態を明らかにすると共に，現代語の本質を究めることに重点をおいて調査研究を進めた。すなわち，話しことば・書きことばの両面から，放送・講演・談話または新聞・雑誌等における言語について，音韻・語彙・文法および表記法の各面にわたって調査を行なっている。この仕事は，国民の生活に必要な基本語彙の作成，語の表記の決定，ひいては，現代標準語の確立，文章表現の改善，国字問題の根本的解決等を目ざし，かつ，現代語辞典の編集を予定するものである。また，一方，各地に行われている言語および言語生活を調査し，一面には，標準語制定の際の一資料とすると共に，一面には，国語政策の普及浸透の効果的方法を発見しようとしている。

国民の言語生活を改善し，国語政策を樹立するには，将来の国民を形づくる児童生徒の言語能力を高め，言語感覚を養うと共に，言語習慣獲得の適切な方法を発見しなければならない。この意味で，言語能力の発達段階を明らかにする調査を行い，かつ，言語の理解・発表の力を高める方法を研究している。

国語は，国民の歴史的所産である。日本人が長い年月にわたってこの国土に営んで来た生活，築き上げて来た思想・文化の歴史は，国語に反映し，結晶している。国語の歴史において力強く動いている流れをとらえて，今後の国語政策の方向を誤りなく規定すると共に，文献あって以来千数百年を通じて用いられた日本語を収集して，国語の歴史的辞典を編集する。

一方，国語資料，国語調査研究資料，国語に関する情報を広く収集し，これを整理して，所内の研究に資することはもちろん，広く一般の人々の利用を待っている。なお，各種の資料，情報の記録は，毎年「国語年鑑」（→9, 10 ページ）として刊行している。

研究実施上の特色　以上の調査研究にあたっては，**体系的な研究計画**のもとに，方法と順序とについて十分な検討を加え，研究者の**有機的共同作業**によって実施している。人文科学において，このような真の意味の総合研究が行われているのは，他にほとんど類例を見ない。また**最新の各種の機械を利用**し，精密な実験を経て成果をあげようとしている。

国立国語研究所設置法（抄）

（目的及び設置）

第一条　国語及び国民の言語生活に関する科学的調査研究を行い，あわせて国語の合理化の確実な基礎を築くために，国立国語研究所（以下研究所という。）を設置する。

2　研究所は，文部大臣の所轄とする。文部大臣は，人事及び予算に関する事項に係るものを除くほか，研究所の監督をしてはならない。

（事　業）

第二条　研究所は，次の調査研究を行う。

一　現代の言語生活及び言語文化に関する調査研究

二　国語の歴史的発達に関する調査研究

三　国語教育の目的，方法及び結果に関する調査研究

四　新聞における言語，放送における言語等，同時に多人数が対象となる言語に関する調査研究

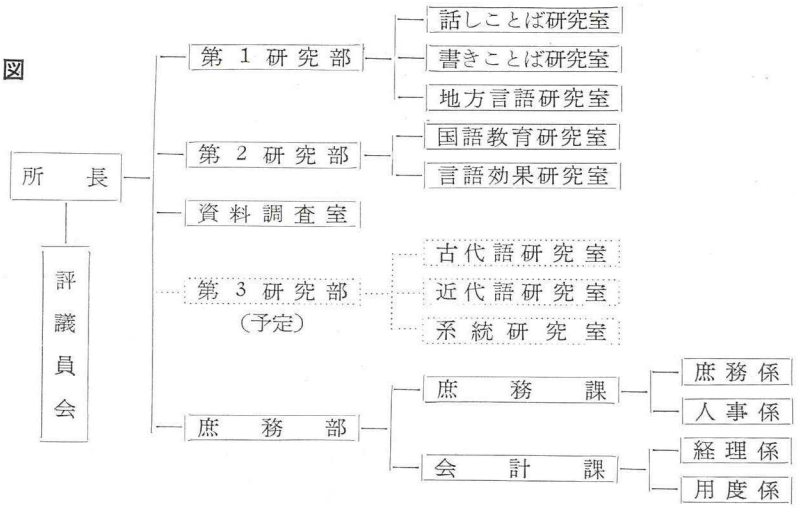
2　研究所は，前項の調査研究に基き，次の事業を行う。

一　国語政策の立案上参考となる資料の作成

二　国語研究資料の集成保存及びその公表

三　現代語辞典，方言辞典，歴史的国語辞典その他研究成果の編集及び刊行

機構図



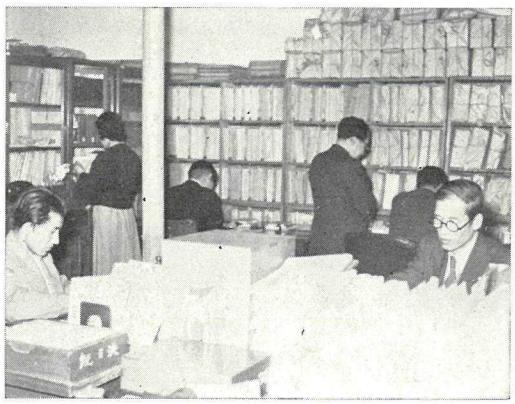
庁舎

昭和23年12月の設立当初から昭和29年9月30日まで，宗教法人明治神宮所有の聖徳記念絵画館の一部を借用していた。また，手ぜまのため，ほかに，三鷹市の山本有三氏の私邸，ついで新宿区四谷第六小学校の一部を借用し，分室として利用していた。

昭和29年10月1日，一橋大学所有の現在の建物に移転した。

東京都千代田区神田一ツ橋1の1所在
木造モルタル塗り，カワラぶき，2階建て
総建坪　323.417坪
研究室　102.0坪　　実験室　13.5坪
図書閲覧室　15.0坪　　講堂　29.0坪

近く，延べ29坪の軽量不燃書庫(東大生産技術研究所の星野昌一教授の考案)が完成する予定である。



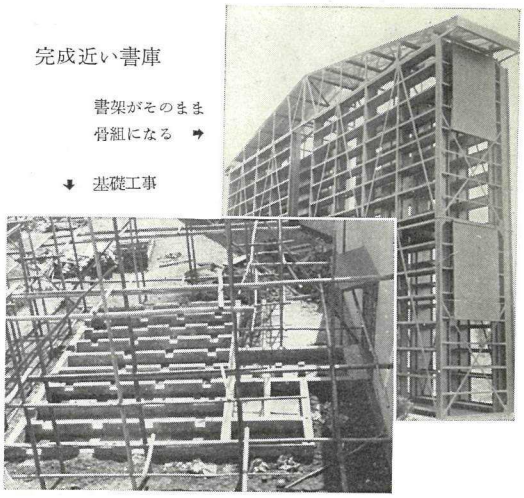
↑ 新庁舎の研究室

絵画館時代の研究室 →

完成近い書庫

書架がそのまま骨組になる →

↓ 基礎工事

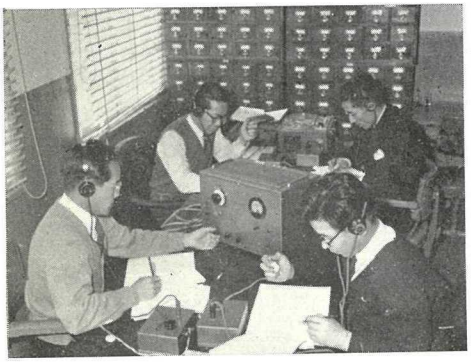


予算と定員

昭和29年度予算	事業費	9,812,000円
	人に伴う経費	16,654,000円
	計	26,466,000円
定員	49人	
研究に従事する人員	32人	
庶務に従事する人員	17人	

話しことば研究室

放送・講演・談話などの話しことばについて，その音韻・語彙・文法などの各方面にわたって調査し，書きことばの研究とあわせて，現代語の本質を究め，言語生活の実態を明らかにするとともに，現代標準語の確立，現代標準語辞典の編集を目ざしている。



モニター・レシーバーによる
ラジオのことばの共同分析

昭和 27・28 年度は，**日常談話語の構造における基本的な問題**について調査を行なった。そのため，録音器を使って，主として東京都およびその近郊で，談話語をテープ80巻（1巻30分）に収めるとともに，比較資料として，落語，講談，座談会，劇，おとぎばなし，講義，ラジオニュース，ニュース解説などを計17巻のテープにとり，機械速記によって文字化した後，イントネーション，文・文節・語の長さ，文の構造，語の種類・使用度数・用法にわけて分析をした。（その成果は「談話語の実態」〈仮称〉として，いま印刷中である。）

昭和 29・30 年度は，イリクチ・イリグチ（入口），ボク・ボク（「僕」のアクセント）などのような**語形の不確定な語**について，どのような語が不確定であるか，それらの語は現在どのように行われているか，それらに対して人々はどんな意識と意見とを持っているかを解明し，標準語制定のための一資料を作ることを目ざした。

29 年度はその第1年度として，

1. 不確定語形（およびそれに対する意見）を研究文献を中心として収集・整理し，
2. 各種辞典，談話語調査のための録音テープその他によって語彙を補足類別し，
3. 不確定語形の台帳および語形の不確定に対する意見・意識の台帳を作成し，
4. 明年度以降の調査の準備を行う

こととし，昭和30年3月現在，1.～3. を終って，約3万語を収録し，4. は進行中である。なお，その過程において，謄写に付した資料には，次のようなものがある。

（1） 不確定語形についての文献一覧（12 ページ）
（2） アクセントの変異に関する調査（73ページ・表8）
（3） アクセントの変異に関する意見の種別（10ページ）
（4） 語形の変異に関する調査（76 ページ）
（5） 有声・無声二形を持つことばの調査（8 ページ）
（6） 語頭以外にガ行音を含む外来語の調査（2 ページ）
（7） 母音に長短二形を持つことばの調査（3 ページ）
（8） 二つの活用をもつ動詞の調査（4 ページ）
（9） 類似の用法をもち従来問題とされていた文法的事実の調査（42 ページ）
（10） 形容詞形容動詞両活用を持つ語の調査（8 ページ）
（11） 一字の漢語を主とするサ変動詞の調査（2 ページ）

ソナ・ストレッチャーによる音声資料の聞き取り

30 年度は，不確定語形が現在どのように用いられ，人人からどのように意識されているかを知ることを目標とした観察調査と意識の調査とを行う予定である。その調査項目・調査対象・調査方法の細部は現在検討中である。

書きことば研究室

特に語彙調査，用字法の調査を中心作業とし，基本語彙の設定，正書法の確立を目ざし，標準語の制定，標準語辞典の作成に資する。

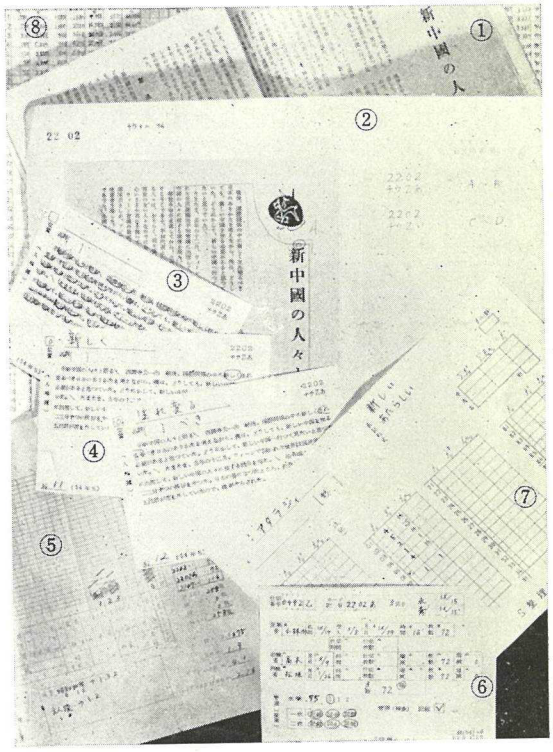
書きことば研究室では，これまでに行なった新聞・婦人雑誌の語彙調査の続きとして，**総合雑誌の語彙調査**を，現在，比較的大規模に行なっている。この作業は，究極において，基本語彙の設定を目標としているのであるが，同時に，語彙調査あるいは基本語彙設定の方法論の確立をも目ざしているものである。すなわち，これまでの語彙調査・基本語彙設定の方法・理論の不備や誤りを修正するために，近代統計理論を応用し，最も進んだ考え方の上に立って，仕事を運んでいる。

昭和 29 年度は，14 種の総合雑誌 1 年分から，全体の約 $\frac{1}{40}$ にあたる 560 ページ分をぬき出し，その全語彙（助詞・助動詞を除く）を採集した。その標本延べ語数は，約 23 万に達している。この標本から，全誌面における一々の語の使用率を推定し，またこれらの語の，それぞれの意味・用法・表記法などについて，詳しく分析を進めている。

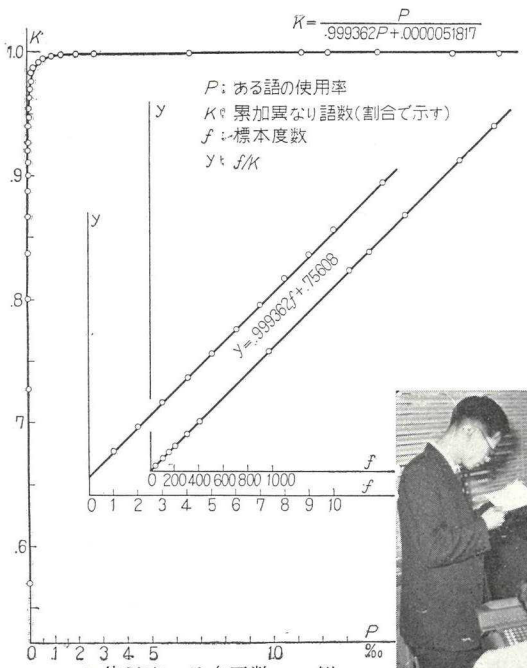
資料は，すべてカードの形にして整理する。原文の紙面を，そこに含まれる語の数だけの枚数のカードに複製した上，一々のカードに所要の語をマークする方法は，分析の際，語を文脈の中でとらえるのに役立ち，また作業の速さ正確さを著しく高めている。

用字法の調査としては，昭和 28 年度以来，「**当用漢字の適用によって生ずる問題とその解決法の研究**」の題で，文部省科学試験研究費の交付をうけ，総合雑誌に現われた当用漢字表外の漢字の使用率，どんな字が用いられているか，それらの文字を用いる語の言いかえ・書きかえの例などについて調査を続けている。28 年度には，当用漢字表外の漢字に即しての調査を行なったが，29 年度には漢字の性格を語彙の広い見渡しの上で明らかにするため，前述の語彙調査において収集された全語彙について，それらの語の表記法を統計的に調査し，問題の語，問題の漢字の分析を行なっている。

語彙調査・用字法調査，ともに，来年度以降は，時局雑誌，文芸雑誌，大衆雑誌その他にも，調査範囲が広げられるはずである。



①雑誌から　②ページを抜く。③カードに謄写印刷し，採集する語を指定，④見出しなど書き入れる。⑤検査を通し，⑥作業の正確さが統計的に管理される。⑦語ごと層ごとに整理し，⑧集計・製表する。



↑ 使用率の分布函数の一例

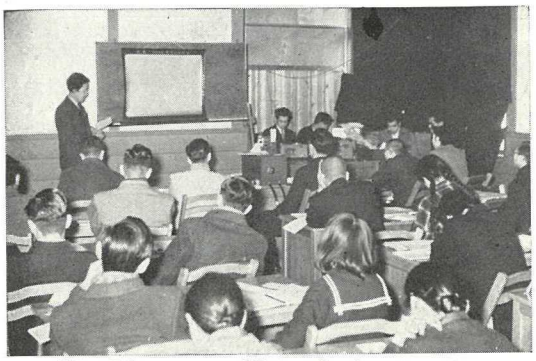
電動計算器による集計 →

地方言語研究室

1. 標準語の確立に役立つ方言資料を得る。 2. 有効な国語政策の立案・遂行のための地域社会における諸条件を明らかにする。

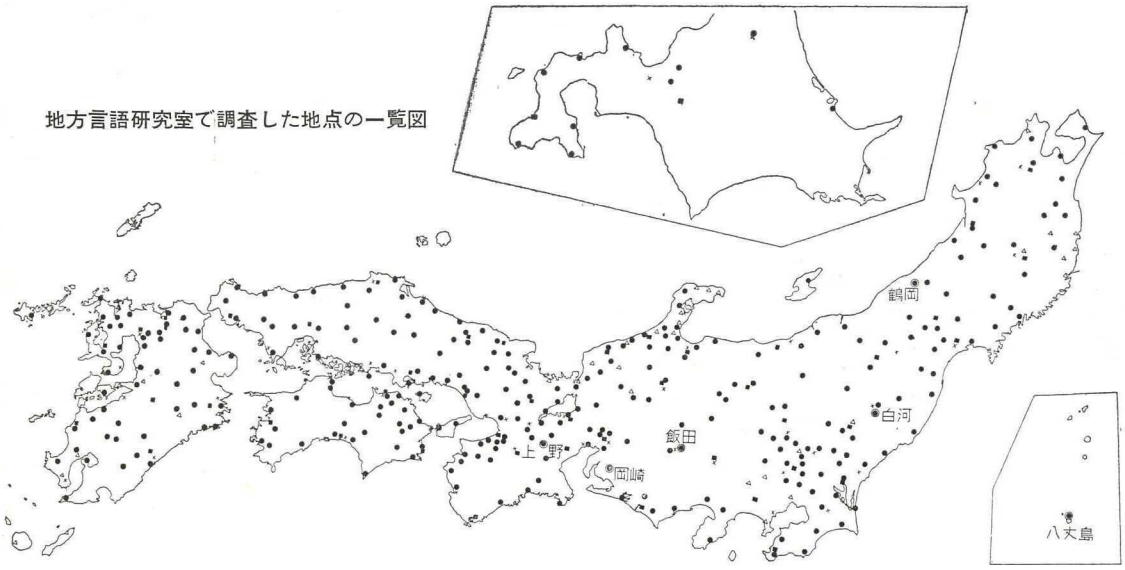
上の二つを目的として，次の調査研究をしてきた。

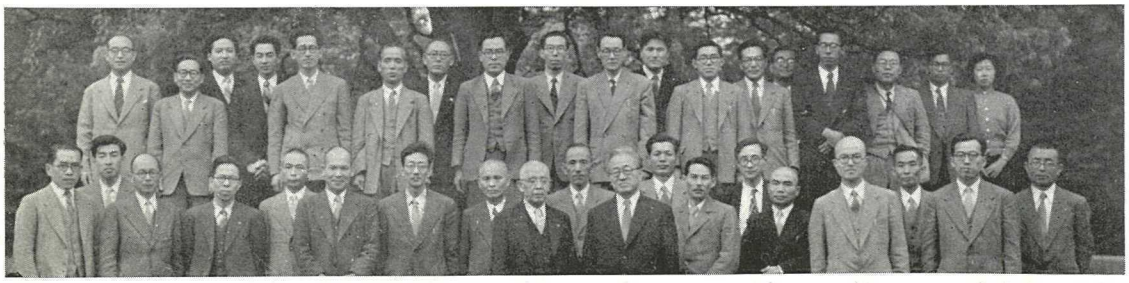
1. 地域社会の言語生活の実態・共通語普及の条件の解明のための調査——八丈島・白河市・鶴岡市・飯田市。
2. 敬語の社会心理学的調査——上野市・岡崎市。
3. 全国諸方言の観察および記述——今までに下の地図の△じるしの地点を調査した。
4. 琉球語辞典の編集。
5. 地方調査員への委託調査の立案と整理・集計。最近は次のような調査を委託した。
   a. 昭和 27 年度：地方言語の敬語に関する調査。その 1.（調査地点は下図の・じるし）
   b. 昭和 28 年度：地方言語の敬語に関する調査。その 2.（調査地点は下図の×じるし）
   c. 昭和 29 年度：各県の方言概観のための調査。（調査地点は下図の ▪ じるし）



敬語調査の一コマ（集合調査法） 幻灯で場面を示し，録音で会話を聞かせて，そのことばに対する反応を調べる。多数の市民（サンプル）が調査に協力した。岡崎市役所会議室で。 1954・3・14

地方言語研究室で調査した地点の一覧図





第 2 回地方調査員全国協議会の参加者 昭和 29 年度の調査の打合わせに上京した地方調査員と関係評議員・所員。 1954・5・16

国　語　教　育　研　究　室

こどもはことばをどう習得するか，どこにその困難点があるか。

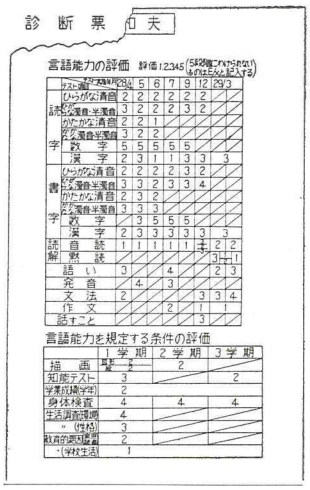
1. 言語能力の発達に関する調査研究

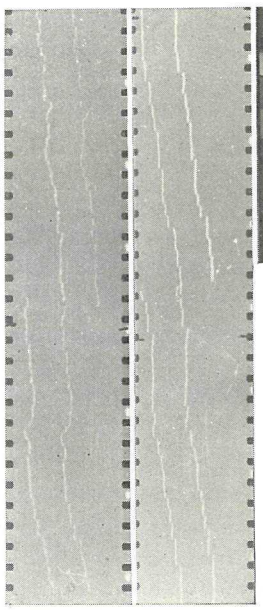
この研究は，全国的に実験学校と協力学校とを設けて，小学校6か年間，聞く力・話す力・読む力・書く力がどれだけ伸びるかを明らかにし，また，その発達を規定する要因をつきとめるものである。これは観察・検査・調査・実験を**ひとりひとりの児童について長期にわたって行う追跡的事例研究**としての特色を持つ。

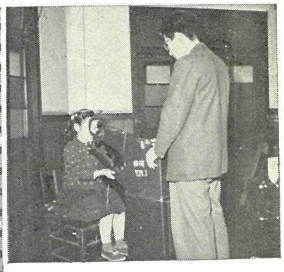
下の図は児童の言語と行動とを観察しているところ。教室活動に見られる児童の言語活動・パーソナリティの諸相を全体的な行動の場で力学的にとらえる。毎日，所員が教室で詳細に観察して，注意すべき事実を個人別の観察カードに逸話的に記録してゆく。また学級全体としての言語能力の特徴をも観察する。観察研究は学期ごとに定期的に行われるテストの成績の妥当性を確かめてゆくとともに，児童および学級の言語能力の総合的診断に重要な役割を持つ。

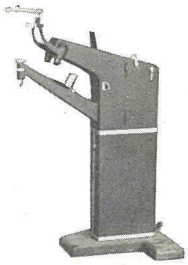
教室観察および観察カード

下の図は事例研究のための**個人別言語能力診断票**。内容は大きく，言語能力と要因との2欄に分かれ，1年間に行われたテスト・調査・実験の結果は，そのつど，学級内における5段階評価法で記録されてゆく。これから，月別・学期別・学年別に言語能力の発達の度合いを知り，聞く・話す・読む・書くの一々の能力を判定する。他方，言語発達を規定する条件の分析から，なぜそうなのかという原因をさぐり，個人個人についての診断と治療の方向がひらかれる。









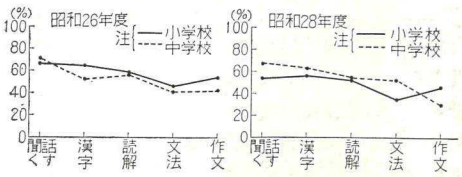
上：眼球運動の実験
下：オフサルモグラフ
左：眼球運動記録図

上の図は**オフサルモグラフ**による読みにおける眼球運動の記録。学年ごとに定期的に実験し，眼球運動のメカニズムを明らかにするとともに，学年発達に伴う読書習慣の発達をあとづける。この装置は読書する児童の両眼に弱い光をあて，その反射光線をレンズで収斂し，フィルムに撮影する。フィルムは縦に一定の速度で回転するから，上のような階段状の線が現われる。縦線は眼球がとまって語を読みとる状態を示し，横線は語から語，行から行への眼球の動きである。右図は低学年のうまい読み手，左図はへたな読み手の眼球運動の記録図である。右図の方が速く，一時に多く語を読み，それほどつかえず，リズミカルな規則正しい読みかたをしている。

2. 国語科学力水準の調査

国語の学力標準設定に関する調査研究は昭和24年度からの続きである。国語科について全国的な学力の水準を明らかにし，国語科学習指導の基底をさぐっている。

国語学力水準調査の結果



上の図は昭和26年度（関東），28年度（全国）の小・中学校の国語の各種能力の調査結果を図にしたもの。問題が同一でないから比較はできないにしても，出題者の基準に対する各能力間の相互関係を見ることができる。

言語効果研究室

マス・コミュニケーションの言語効果を調査研究する。

1. 言語効果研究室の仕事　言語による大衆への伝達，いわゆる**マス・コミュニケーション**の問題を調査研究するのがこの研究室の仕事である。言語による大衆への伝達は，現代社会では新聞とラジオによることがもっとも強力である。したがって，この研究室では，新聞とラジオによる大衆への言語効果の問題に取りくんでいる。

2. 新聞による言語効果の調査研究　新聞による大衆への言語効果では，「新聞への接近・理解とその影響」という分野について，昭和 23 年度には小・中学生の一部について調査が行われ，昭和 29 年度には東京・秋田の全日制普通科高校生 5,150 名について調査が行われた。

この 29 年度の調査研究「**青年の新聞への接近・理解とその影響**」はきわめて大がかりなものである。だいたい 3 カ年計画の調査研究で，文部省の科学研究費交付金による総合研究として 29 年度は 61 万円が認められた。研究所側は所長以下 9 人，日本新聞協会 7 人，輿論科学協会 2 人，堀川直義（立教大学），森岡健二（東京女子大）による総合研究である。

この総合研究のねらいを要約すると，次のようになる。民主社会の発展に大きな原動力となっている**青年の社会認識と社会的態度への新聞の影響と効果**を新たな角度から明らかにしようとするのが本研究の目的である。このために，東京と秋田の全日制普通科高等学校 20 校（東京 16 校，秋田 4 校）について，サーヴェイ調査 5,150 名（東京 3,150 名，秋田 2,000 名），事例調査 500 名を調査対象に選んだ。これらに対して，青年が新聞に接近するしかたや新聞記事理解の程度を生活環境との関連で調査し，新聞記事の表現が青年に与える効果を実験的に調査した。調査項目は次のようである。

a.　地域による文化水準・言語能力は非常に開きがあるから，それぞれの地域的基盤において次の 2 点を明らかにする。

（イ）　新聞への接近度，全体的な読みかたがどのような学年的発達をとげているか。

（ロ）　記事の言語的理解度がどのような学年的発達をとげているか。

b.　記事の書き表わしかたが高校生の理解にどう反応するかを，読者の読みの態度との関連において調査研究する。

c.　読みの態度と生活環境との関連を調査し，高校生の社会的態度の形成に与える新聞記事の影響を調査研究する。

d.　特に高校生が国際問題にどのような理解を持っているかを，新聞の国際記事の読まれかたの面から，その種類・内容ならびに記事表現などの観点から調査する。

このような調査の結果として，（1）接近・理解の度合には，地域の文化度が大きく影響すること，（2）性別・学年別によってかなりの差異があることなどが知られた。

3. ラジオによる言語効果の調査研究　29年度は，「放送が児童の言語に与える影響」という題目で，日本放送協会放送文化研究所へ研究を委託している。

資　料　調　査　室

国語資料・国語調査研究資料・国語に関する情報を広く収集・整理し，利用に供している。諸刊行物の編集・刊行，第3研究部ができるまでの基礎調査，刻々起る諸問題の調査も兼ねて行なっている。

国語関係文献の調査

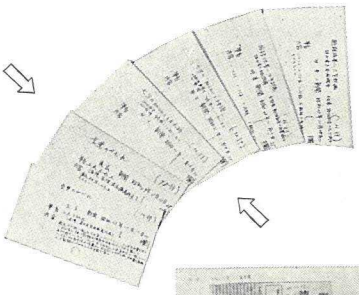
国語に関する学問の一般を知り，学界の動向や世論の実態をとらえるために，次のような文献調査を行なっている。

刊行書の調査

国語学・国語問題・国語教育・言語学・言語技術・国語資料・辞典などの刊行書について書名・著（編）者名・発行所・年月・型・ページ数・内容を調べ一年ごとの分類カード目録を作っている。

雑誌論文の調査

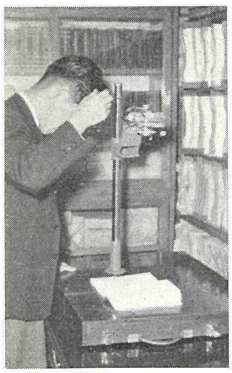
当研究所購入の諸雑誌ならびに各大学・研究所などから寄贈される逐次刊行物から関係論文を調べ，題目・筆者・誌名・年月巻号・ページ数および内容を記載したカード三通を作り，分類別・雑誌別・筆者別三種のカード目録を作っている。



新聞記事の調査

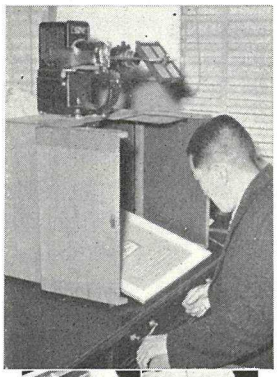
朝日新聞
朝日（夕刊）
毎日新聞
毎日（夕刊）
読売新聞
読売（夕刊）
東京日日新聞
東京タイムズ
時事新報
東京新聞
京阪地方の新聞
その他二三紙
読書新聞
図書新聞
読書タイムズ
新聞協会報

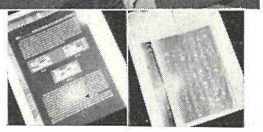
⇨ 国語関係記事の切抜・はりつけ



複写装置

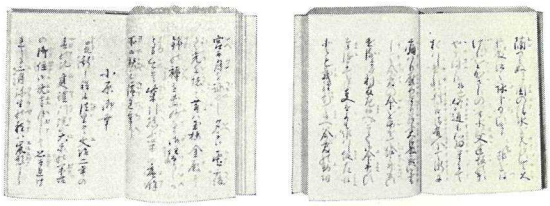
キャノンCK-A型の携帯用である。諸資料（図書・古写本・写真等）を35ミリフィルムに複写して，その保存・利用の便をはかっている。近く本格的な装置を備えることも考えている。





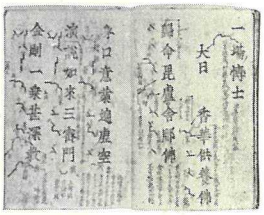
マイクロリーダー

35ミリ・フィルムに複写した資料を，拡大して，反射によって下の白い板に写し出す装置である。現在ではもっと精巧なものもあるが，マイクロフィルムによる文献の収集整理を始めてから必要になるであろう。



（平曲の譜本）

音韻資料の収集　平曲（へいきょく）・声明（しょうみょう）など，比較的忠実に古い音を伝えていると思われるものを録音する。現在までに，平曲は，大原御幸・那須与一・宇治川・卒塔婆流しを，声明は，東大寺で行なっているものを収蔵している。



（声明の譜本）

刊行物と研究業績

○国立国語研究所年報 1～5（昭和 24～28 年度）

年報各号に報告された研究課題名次の通り。（独立の報告書になったものおよび委託研究をのぞく。）

号数　　課題名，（　）内は続いて報告された年報の号数

1　文字配列の合理化に関する実験的研究（2, 3, 4, 5）
　国語の歴史的発達に関する調査研究（2, 3, 4）
　辞典編集の方法に関する調査研究（2, 3, 4）
　国語学力標準設定に関する調査研究（2, 3）
　東京方言および各地方言の調査研究
　現代共通語の実態の調査研究
　漢字・漢語に関する調査研究
　造語法の研究
　国語教育に関する研究
2　全国方言語彙の調査（3）
　飯田市および上久堅村における言語生活調査（3）
　個人差に応じた国語学習指導方法の研究（3）
　義務教育終了者に対する語彙調査の試み
3　「読みやすさ」の基礎的研究（4）
　学校における共通語指導状態の調査
　白河市におけるパーソナリティー調査と新聞調査
4　文字言語の学習負担についての研究（5）
　三重県上野市における敬語の調査（5）
　新聞に対する態度・経験・能力の発達に関する調査
5　日常談話語の調査
　総合雑誌語彙の準備調査
　語彙調査に生ずる狂いの種類・原因・対策
　当用漢字の実施によって生じた問題とその解決法の研究
　愛知県岡崎市における敬語の調査
　国語学力水準調査

○現代語の助詞・助動詞——用法と実例　1951

標準語の体系を確立するための基礎作業として助詞・助動詞の意味・用法の実態を分類記述した。資料は24年4月から1年間の新聞雑誌34種類。助詞・助動詞の認定は通説にこだわらず，かなり自由に，実際的にしてある。

○語彙調査——現代新聞用語の一例　1952

ある1種の新聞について，1カ月間には，どれほど違った種類の語が用いられるか，それぞれの語がどれほどくりかえし用いられるかを知ることをおもな目標とする。24年6月の朝日新聞全紙面による全数調査。

○現代語の語彙調査 婦人雑誌の用語　1953

25年1年間の「主婦之友」「婦人生活」を資料とする標本調査。語彙表を主部分とし，以下の考察を含む。(1)基本語彙をきめる尺度としての「語の使われる度合」，(2)意味による語の分類試案，(3)〈する〉の用法 (4)漢語の複合形式 (5)「婦人生活」実用記事の助詞・助動詞。

○送り仮名法資料集　1952

「明か」「明らか」「明きらか」，送り仮名の乱れは国語問題の一つの頂点である。9種の資料による送り仮名対照表と，明治以来11種の公私文献を収録し，もっともよい統一案を作るための基礎資料とする。

○八丈島の言語調査　1950

「鳥も通わぬ」八丈島5か村がどういう言語社会を構成しているか。そこで，方言と共通語とがどのようにからみあっているか。「共通語を話す度合」はどのように測られるか。そして，正しい共通語とは何か。

○言語生活の実態——白河市および附近の農村における　1951

○地域社会の言語生活——鶴岡における実態調査　1953

従来の言語研究は，言語そのものの構造を観察的方法で分析した。ここでは，一つの言語社会でどのようなことば（方言と共通語）が実際に使われているか，その外的・文化的要因は何かを近代統計学理論による計画的方法で調査した。白河・鶴岡ともに人口移動の激しくない，調査に手ごろな大きさの地域として選ばれた。統計数理研究所，民俗学研究所との共同調査で，いずれも文部省科学試験研究費補助金を受けたもの。

○入門期の言語能力　1954

入門期——読みの本格的学習に入れるまでの時期——とはいつか，その時期において児童の全心身の発達はどうなっているかを確かめることは，教科書をつくるためにも，学習を指導するためにもぜひ必要だ。「言語能力の発達に関する調査研究」入門篇。

○少年と新聞——小学生・中学生の新聞への接近と理解　1954

われわれの日常生活から新聞は取り除けないものになっている。どうして新聞がこんなに生活にくいこんだのかを知るためには，まず，われわれがいつどのように新聞を読み始めたかを知る必要がある。東京・千葉（都市と農村）3地点で小中学生につき，これを調べた。

○国語関係刊行書目（昭和 17～24 年）

事　　業

☆**研究発表会**

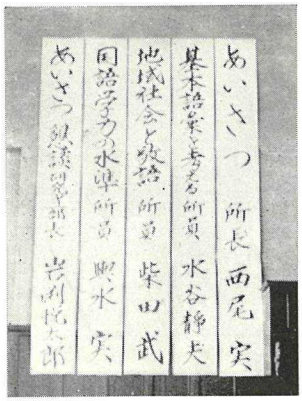
第1回　1951.6.2（東大法文経 36 番教室）

疎開児童のことば　北村　甫
語彙論をめぐって　林　大
記号化とパーソナリティー　森岡健二
読めない子供たち　平井昌夫

第2回　1953.3.28

（お茶の水大講堂）

基本語彙を考える　水谷静夫
地域社会と敬語　柴田　武
国語学力の水準　興水　実



第二回研究発表会のプログラム

☆**公開講演会**

第1回　1950.1.28

（医師会館講堂）

最近の東京語　所員　中村通夫
言語の構造的全体　所員　興水実
どうすればいいか　評議員　土岐善麿

第2回　1950.5.20（京大文学部）

東京語の性格　所員　中村通夫
国語教育について　兼任所員　遠藤嘉基
日本語の系譜について　京大教授　泉井久之助
国語国字問題の方向　評議員　土岐善麿

第3回　1954.3.10（大阪毎日新聞社講堂）

われわれの言語生活　所長　西尾実
私の見た日本語の性質　京大教授　吉川幸次郎
表現の可能性　評議員　中島健蔵

☆**連合講演会**　1953.11.28（朝日新聞社講堂）

統計数理・国立教育・国立遺伝学各研究所との連合で催された。西尾所長が開会のあいさつを述べ，所員中村通夫が参加した。演題は「現代人の言語生活」。

☆**「国語年鑑」の編集**　識者・学者からひろく一般の人人にわたって，一年間の，ことばに関するあらゆる意見・研究・声を記録し，展望・文献・雑報に整理する。

☆**雑誌「言語生活」の監修**（筑摩書房発行）26年10月創刊。主要特集「放送のことばと効果」「新聞の文章」「方言」「映画とことば」「翻訳」（各2,3,5,23,26号）29年1年間の特集①女性と言葉②日本人と外国人の言語生活③教科書の文章④十代の言語生活⑤国語審議会報告⑥関西人の言語意識⑦戦後話し方の上達⑧語源をめぐって⑨能率と言葉⑩作家の用字用語⑪言葉の病理学⑫広告と表現

☆**内地留学生の受入れ**　各都道府県からの内地留学生を1年～3カ月の期間で受入れ，その研究に協力している。24年度から29年度までの各年度に受入れた留学生の数は，11，4，2，9，8，5で，計（延べ）39名におよんでいる。

研　究　協　力

☆**地方調査員**　創設以来，各都道府県ごとに地方調査員を委嘱し，地方における言語および言語生活の実状調査に協力を求めている。（→5 ページ，15 ページ）

☆**実験学校・協力学校**　児童の言語能力の発達や国語教育の目的・方法・効果について研究するため，各地に実験学校・協力学校を委嘱している。29 年度下の通り。

（実験学校）　東京都四谷第六小学校
（準実験学校）　神奈川県比々多小学校

（協力学校）			
東京都杉並区	方南小学校	長野県	松代小学校
東京都中野区	新井小学校	大津市	中央小学校
兵庫県	幸世小学校	逗子市	久木小学校
小山市	小山第二小学校	静岡市	中田小学校
長野県	豊野西小学校	北上市	二子小学校
		北海道	白老小学校

☆**共同研究**　研究課題略名と協力を得た機関

○白河調査—1949……統計数理研究所・民俗学研究所
○鶴岡調査—1950……統計数理研究所
○上野調査—1952…統計数理研究所・国立教育研究所
○岡崎調査—1953……統計数理研究所
○少年と新聞調査—1953……日本新聞協会
○青年と新聞調査—1954
…日本新聞協会・輿論科学協会

☆**委託研究**

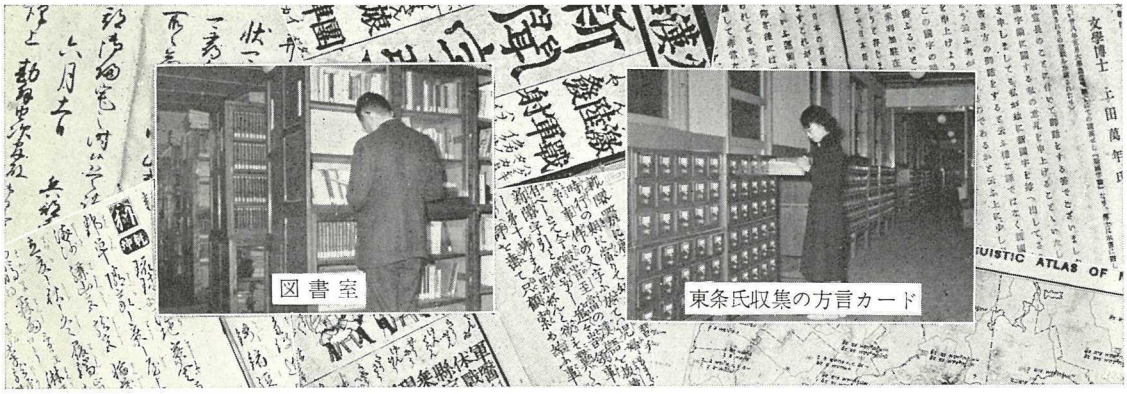
【地方調査員に】「県下の方言の概観ないし県下の言語状態の概観」等（24 年度），「地方言語の特徴形の実態調査」等（25 年度）「地方言語の語法に関する研究」（26年度），「地方言語の敬語に関する調査」（27・28 年度）

【日本放送協会放送文化研究所に】「放送における言語的条件と理解度の関係の実証的研究」（24 年度），「放送言語理解尺度設定の基礎的研究」（25 年度），「スポット・アナウンスの理解度と効果に関する研究」（26年度），「ラジオ・ニュース文体の研究」（27，28 年度），「放送が児童言語に与える影響」（28 年度）

【東大新聞研究所に】「新聞黙読作業に関する実験的研究」（24 年度），「読紙作業の実験的研究」（25 年度）

留学生および臨時筆生の研修講議

施　　設



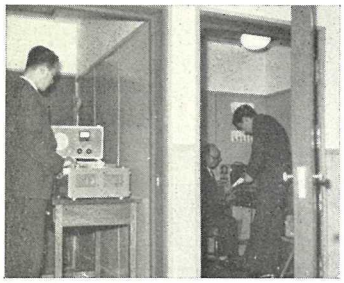
地の写真は，【左上】「庭訓往来」（永祿11年写），【左下】「草書本節用集」（慶長中ごろ刊），【中・上下】「新聞字引」（明治10年ごろ），【右上】「国語改良異見」（明治33年刊），【右下】アメリカ（ニューイングランド）の「言語地図」（1943年）。

図　　書

1955年1月現在，蔵書数は約2万部。国語に関する文献をおもに，関連する内外の文献をも収集。文献・資料のうちには，全国方言に関する大田栄太郎・東条操両氏の収集を中心とする，他に得がたい資料約2,000部，東条操氏集録の方言語彙カードを五十音別・地域別・事項別に分類・整理しつつあるもの約120万，保科孝一氏の収集による第1次大戦前の東欧諸民族の言語問題に関する文献などがある。

実　験　室

テープ・レコーダー，オシログラフ，ソナ・グラフの操作のために，防音室3，暗室1，現像室1（総坪数13.5坪）がある。（→16ページ）



← 防音室

現像室 →

機　　械

研究所では，観察をいっそう精密にし，できるだけ客観的にするために，いろいろな機械を活用している。

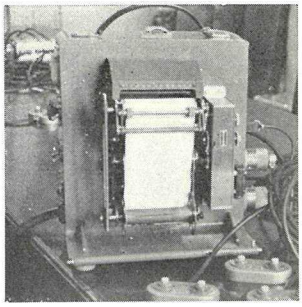
機械のうちで最も活躍しているのは**テープ・レコーダー**である。いろいろな場面の話しことば，各地の方言，失われつつある音声言語資料（平曲や声明）を収録するためにはもちろん，言語調査，国語教育のテストにも利用されている。いま使っているのは，携帯用8台（東通工H型3，P-1型2，P-3型1，R型1；新日本電気1），肩掛け2台（東通工M-2型1，M-3型1）（→13ページ），大型1（東通工LP-3型）。

録音されたことばをたやすく書き取るために，**ソナ・ストレッチャー**（Sona-Stretcher——Kay Electric Co.）が利用されている。これはちょうど高速度写真のように，音声を引き伸ばした形で聞き取ることができる。（→4ページ）

音声そのものを微細に記録するために**オシログラフ**（横河電機 N-6 電磁型）が用意されているが，最近，**ソナ・グラフ**（Sona-Graph——Kay Electric Co.）という，新しい周波数分析機がアメリカから輸入され，機械の調整を終って近く計画的な実験を始めようとしている。1回に記録しうる音声は短かい（2.4秒）けれども，子音までかなりの程度分析できる上に，記録を得るまでに数分しかかからないので便利である。（→13ページ）

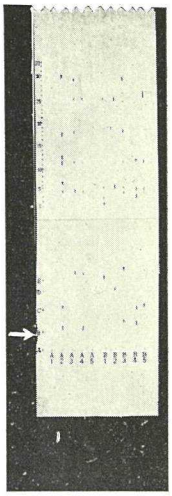
ことばの流れに刻々どのように反応するか，それを一度に多人数について記録するために，**アナライザー**（東京計測器）を利用している。NHKでは番組の分析に使っているが，研究所では上野市や岡崎市での敬語の調査に利用した。（→13ページ）

読みの生理を明らかにするために，眼球運動を記録する**オフサルモグラフ**（Ophthalmograph——American Optical Co.）が輸入され，大量の記録を得つつある。（→7ページ）　★



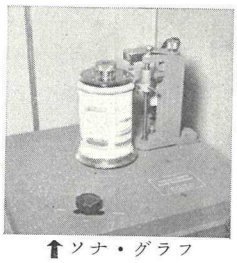
⬆ アナライザー

⬅ アナライザーによるテストの状況



アナライザー記録紙 ➡

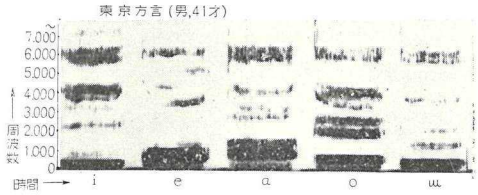
黒く見える縦の短かい線が，10人の被調査者（A1—B5）のそれぞれが話線のどこで抵抗を感じたかを示している。たとえば，Bのところ（Bという文字のわきの黒点は調査者がマークしたもの）では，A2,A4，B3，B4（少し遅れているものもあるが）の合計4人が「言い方として変だ」と感じたことがわかる。岡崎での敬語調査（→ 6ページ）に使った。

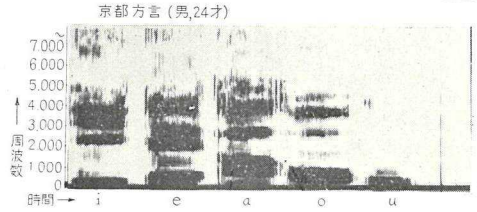


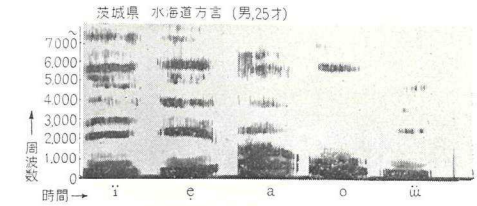
⬆ソナ・グラフ

⬅ソナ・グラフによる実験の状況

⬆オーディオ・メーターによる児童の聴力検査





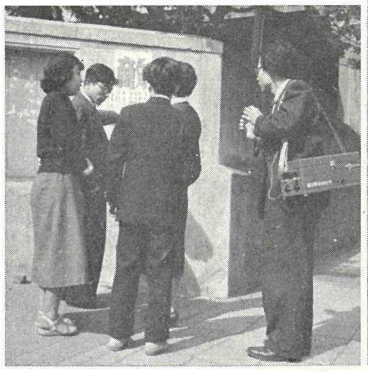


⬅ソナ・グラフ記録紙（ソナグラム）

各地方言の母音のソナグラム。縦軸に周波数，横軸に時間（最大限2.4秒）。強弱が濃淡となってあらわれている。

肩掛け録音器による話しことばの収録 ⬇

⬇肩掛け録音器



★ 文献を集めるためには**複写装置**2台（コニカ用，キャノン用）を使っている。なお，**マイクロリーダー**1台（東方光学）がある。（→9 ページ）

統計的な計算処理のために，特に**マーチャント電動計算器**と**オドナー電気加算機**（Original Odhner X・11・C・5）が能率をあげている。（→5 ページ）

このほか，ラジオ放送の共同聞き取りのための**モニター・レシーバー**（光音電波）（→4 ページ），電波の測定のための**オシロスコープ**（ナショナル CT-75D），児童の聞き取り能力と関係させて聴力を調べるための**オーディオ・メーター**（山越製作）などがある。（→13ページ）

名　　簿

			(就任年月日)
所長		西尾　実	24・1・31
第1研究部	部長	岩淵悦太郎	24・2・28
話しことば研究室	主任	中村通夫	24・1・31
〃		大石初太郎	25・4・15
〃		飯豊毅一	24・3・31
〃		宇野義方	24・3・5
〃		進藤咲子	24・6・1
書きことば研究室	主任	林　大	24・6・30
〃		永野　賢	24・2・28
〃		斎賀秀夫	24・3・31
〃		水谷静夫	24・2・28
〃		石綿敏雄	29・1・1
地方言語研究室	主任代理	柴田　武	24・2・28
〃		北村　甫	24・2・28
〃		野元菊雄	25・12・31
〃		上村幸雄	27・5・1
第2研究部	部長	興水　実	24・2・28
国語教育研究室	主任(兼)	興水　実	24・2・28
〃		高橋一夫	24・2・28
〃		上甲幹一	24・8・15
〃		芦沢　節	24・3・31
〃		村石昭三	28・10・1
〃	(非常勤)	岡本圭六	28・5・1
言語効果研究室	主任	平井昌夫	24・2・28
〃		林　四郎	28・12・1
〃		寺島　愛	24・6・1
資料調査室	主任(兼)	岩淵悦太郎	24・2・28
〃		村尾　力	26・8・16
〃		有賀憲三	24・6・1
〃		広浜文雄	25・1・31
〃		高橋太郎	28・8・1
〃		吉沢典男	28・8・1
〃		渡辺友左	28・4・1
〃		芳賀清一郎	24・6・1
庶務部	部長	細井房夫	25・10・11
庶務課	課長	真取正二	25・11・15
〃		鈴木篁二	28・5・16
会計課	課長	黄木得二郎	27・5・1
〃		三浦清伍	24・2・14
〃		伊藤仲二	25・5・31
〃		渋谷正則	24・3・20

評　議　員

(昭和30年1月現在)

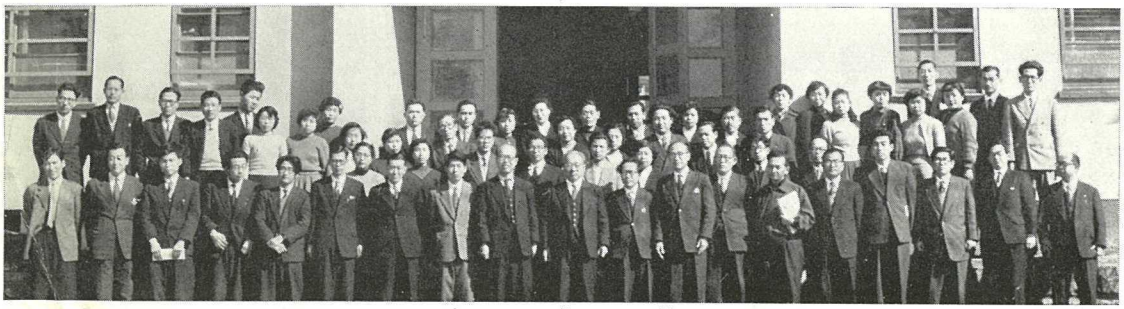
評議員会会長	学士院会員	柳田国男
評議員会副会長	成城大学学長	山崎匡輔
明治大学教授		阿部知二
東洋パルプ会長・国語審議会委員		伊藤忠兵衛
国学院大学教授・国語審議会副会長		金田一京助
東京大学教授・国語審議会委員		倉石武四郎
京都大学教授・国語審議会委員		桑原武夫
東京芸術大学教授・国語審議会委員		颯田琴次
都立小石川高校長		沢登哲一
学習院大学教授		東条　操
東京大学教授・国語審議会委員		時枝誠記
東京都立日比谷図書館長・国語審議会会長		土岐善麿
津田塾大学教授		土居光知
東京大学講師・国語審議会委員		中島健蔵
お茶の水女子大学教授・国語審議会委員		波多野完治
東京大学教授		服部四郎
日本放送協会会長		古垣鉄郎
共同通信社専務理事		松方義三郎
カナモジカイ理事長・国語審議会委員		松坂忠則

兼任所員

		(就任年月日)
金沢大学教授	浅井恵倫	26・5・15
京都大学教授	遠藤嘉基	24・2・4
東北大学教授	佐藤喜代治	26・12・14
広島大学助教授	藤原与一	24・2・4

臨時筆生

主として，調査研究の集計・整理にあたり，研究補助者の役割を果たしている。計23名。各研究室に2—3名ずつ。



全　職　員

評議員会
毎年の事業計画その他重要事項について審議し，所長に助言する。

柳田評議員会会長

所員会議
毎水曜日に開かれる。ここでは，主として研究に関する討議が行われる。

旧職員（五十音順）

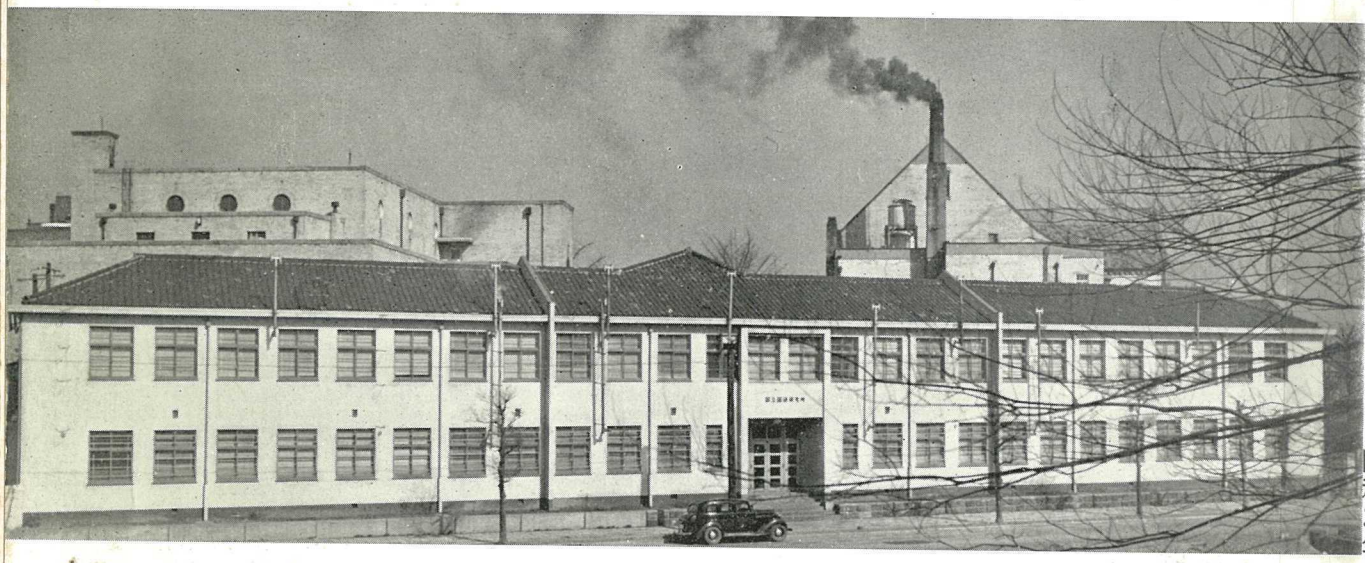
氏　名	就任年月日	退職年月日	現　職
井手成三	23・12・20	24・1・31	森林審議会委員（元文部次官・所長事務取扱）
（研究部）			
浅井恵倫	24・6・1	26・5・10	金沢大学教授
岩佐　正	24・2・28	24・12・28	広島大学教授
内田道夫	24・6・1	25・6・30	東北大学助教授
大野彌德子	24・1・7	28・3・31	
草島時介	24・2・14	28・9・16	東京教育大学教授
塩入元義	25・10・31	27・3・31	
島崎　稔	24・6・1	27・4・15	高崎市立経済短期大学講師
高橋　進	27・4・1	28・4・16	東京教育大学学生
友部　浩	26・1・16	28・6・1	文部省調査局国語課
森岡健二	24・6・1	28・9・30	東京女子大学助教授
山之内るり	24・2・28	30・1・31	
（庶務部）			
井上　繁	24・1・13	25・11・15	文部省調査局調査課
斎藤　正	23・12・20	25・10・11	文部省初等中等教育局地方課長
武田喜美子	23・12・31	25・5・31	
樋口敬治	24・1・14	25・4・15	文部省大臣官房会計課
宮沢幹郎	24・1・19	27・5・1	東京大学事務局会計課予算掛長
（非常勤職員―研究部―）			
大間知篤三	24・2・28	26・3・31	民俗学研究所所員
金田一春彦	24・2・28	27・3・31	名古屋大学助教授
関　善二	26・1・4	27・3・31	都立芝商業高校教諭

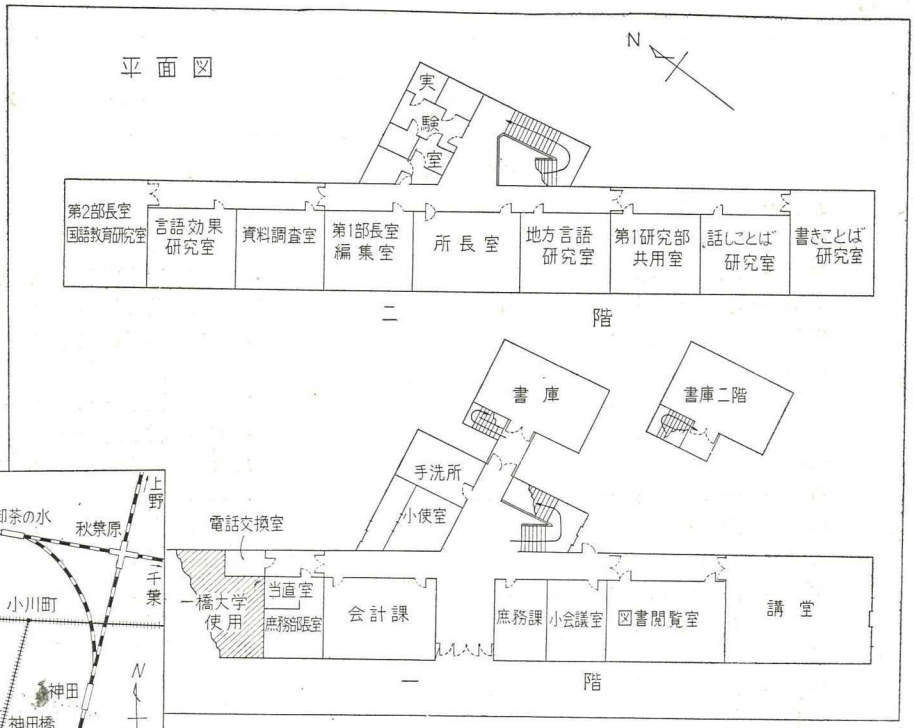
地方調査員（昭和29年度）

北海道	五十嵐三郎	北海道大学文学部
北海道	石垣福雄	道立札幌北高校
青森県	此島正年	弘前大学教育学部
岩手県	小松代融一	県立杜陵高校
宮城県	堀籠敬蔵	宮城県警察学校
秋田県	北条忠雄	秋田大学学芸学部
山形県	斎藤義七郎	川崎市立川崎商業高校
福島県	一谷清昭	県立福島女子高校
茨城県	田口美雄	県立土浦第二高校
栃木県	多々良鎮男	宇都宮大学学芸学部
群馬県	上野　勇	県立沼田女子高校
埼玉県	大久保忠国	埼玉大学文理学部
千葉県	大岩正仲	千葉大学文理学部
神奈川県	日野資純	弘前大学文理学部
新潟県	剣持隼一郎	県立柏崎高校
富山県	大田栄太郎	
石川県	岩井隆盛	金沢大学教育学部
福井県	佐藤　茂	福井大学学芸学部
山梨県	清水茂夫	山梨大学学芸学部
長野県	青木千代吉	信濃教育会教育研究所
岐阜県	筧　五百里	岐阜大学学芸学部
静岡県	望月誼三	静岡大学教育学部
愛知県	野村正良	名古屋大学文学部
三重県	堀田要治	県立鈴山高校
滋賀県	井之口有一	西京大学女子短期大学
京都府	奥村三雄	京都学芸大学
大阪府	前田　勇	大阪学芸大学
兵庫県	和田　実	神戸大学文学部
兵庫県	岡田荘之輔	温泉町立温泉小学校
奈良県	西宮一民	帝塚山学院短期大学
和歌山県	村内英一	和歌山大学学芸学部
鳥取県	広戸　惇	鳥取大学文理学部
島根県	岡　義重	
岡山県	虫明吉治郎	県立操山高校
広島県	村岡浅夫	五日市中学
山口県	渡辺　保	山口市白石中学
徳島県	宮城文雄	徳島大学学芸学部
香川県	近石泰秋	香川大学学芸学部
愛媛県	杉山正世	県立今治工業高校
高知県	土居重俊	高知大学教育学部
福岡県	都築頼助	福岡学芸大学
佐賀県	小野志真男	佐賀大学教育学部
長崎県	西島　宏	長崎大学学芸学部
熊本県	秋山正次	熊本大学教育学部
大分県	糸井寛一	大分大学学芸学部
宮崎県	岩本　実	宮崎大学学芸学部
鹿児島県	上村孝二	鹿児島大学文理学部

128929

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE





国立国語研究所

東京都千代田区神田一ツ橋1—1
電話：九段(33) 4295～6

国立国語研究所
1001795846